令和６年度 12 月 10 日
研究推進委員会

大田区立山王小学校研究発表のアンケートより
本校の研究についての質問と回答

①５年生、６年生の単元の導入はどのように行ったのですか。

５年

「おおたの未来づくり」という教科が、５年生から始まるため、「おおたの未来づくり」についてのオリエンテーションを行いました。児童に、５年生では「ものづくり」を行うことや株式会社ライフコーポレーションと連携しながら学習を進めていくこと、現在ライフから新作パンの企画提案の依頼が来ていることなどを伝えました。

最初の企画書作成では、企画書を作成するために必要な情報は提示せずに、グループごとに思い思いの企画書を作成しました。ライフからフィードバックをいただいた時に、「自分達が考えた企画書に足りない視点が何か。」ということが明確に分かり、今後の活動への意欲にも繋がっていくだろうと考えたからです。

６年

５年生の時に、学年で、「おおたの未来づくり」についてオリエンテーションを行いました。学習内容だけではなく、大田区には多くの特色や魅力があることや、「ものづくり」がどのように行われているかについて説明しました。

６年生では、「おおたの未来づくり」については説明せず、１学期に行った総合的な学習「地域を探れ！山王調査隊」や家庭科「共に生きる地域での生活」の学習内容と絡め、山王の地域のいいところを想起させて地域巡りへと繋げていきました。今回、オリエンテーションから学習を開始しなかったのは、授業パートナーの臼木先生から、「山王のいい点や悪い点を探すという視点をもちながら地域巡りをし、地域のことが分かったうえでオリエンテーションを聞く方が、よりまちづくりについて理解を深めることができる。」と、助言をいただいたからです。

②こどもたちに「やりたい」と思わせるために、どんな工夫を行いましたか。

５年

・児童にとって身近な企業と連携をして学習を行いました。日頃からライフで買い物をする児童もいます。また、３年生の時に、社会の「くらしとお店」の単元で、スーパーマーケット見学をする時に、ライフに行きました。
・フィードバックをもらう機会を３回設定しました。また、コンセプト設定やデザインを考える時に児童から「直接、ライフに見学に行ってみたい。」「ライフで働く人に質問してみたい。」という発言があり、ライフへ見学に行き、インタビューを行いました。
・株式会社マクロミルとも連携し、マーケティングリサーチの仕方について具体的に話をしていただきました。
・可能な限り、児童の企画提案が実現できるよう検討してもらっています。
・授業中は、グループで活動する時間を多く確保しています。また、毎時間の役割分担を明確にし、一人一人が意見を言いやすくしました。
・ホワイトボードを使ったり思考ツールを活用できるようにしたりすることで、児童が考えを可視化し、

整理できるようにしました。

６年

・地域巡りでは、児童がまちの様子について、それぞれが考えた視点をもって見学できるようにしました。
・コンセプト設定では、思考ツールを活用させることで、考えを整理しながら活動できるようにしました。
・授業パートナーを複数お願いすることで、児童の「まちづくり」についての理解を深めました。大正大学准教授　臼木先生には、「社会では、どのようにまちづくりを行っているか」について、大田区役所の方には、「大田区のまちづくりの現状」について話していただきました。
・どんなまちづくりを行いたいかアンケートを取り、考えの近い児童同士をグループにしました。また、グループの人数を４人に設定したことで、話合いや調査活動の中で、それぞれが役割をもてるようにしました。

③６年生は「地域の方々へアンケートを行った。」と発表にありましたが、どのようにお知らせをして実施したのですか。

・Google フォームで作成したアンケートの QR コードを載せたプリントを全校に配布し、協力をお願いしました。また、近所の知り合いの方にアンケートをお願いした児童もいました。

④なぜ、「班カード」（役割分担）の記入が児童同士の交流のきっかけになるのですか。

１班	
A（価格）	B（人気のパン）
C（キャッチコピー）	D（人気の具材）

２班	
A（価格）	D（人気の具材）
E（アンケート分析）	C（キャッチコピー）

３班	
B（人気のパン）	C（キャッチコピー）
D（人気の具材）	E（アンケート分析）

上の図のように、それぞれの班（青・黄・赤）で毎時間役割分担（例：価格を調べる担当、人気のパンを調べる担当、キャッチコピーを調べる担当など）をして活動を行います。限られた時間の中で活動を行うため、自分の調べていることの他にも良い情報があるかもしれません。違う班の同じ役割をもつ児童同士が交流することで、調べた内容の質が高まると考えました。班カードに役割を書かせて黒板に貼っておくことで、交流したい児童が班カードを見て、同じ役割の児童を見つけ積極的に交流できるようにしました。

⑤５年生、６年生のふり返りでは、ICT を活用していました。こどもたちの活用力の高さに驚きました。日頃から行っている指導の工夫はありますか。

５年・６年

日々の学習の中で、タブレット端末を使うようにしています。活用の場面をいくつか紹介します。

・他教科でもオクリンクプラスを使った振り返りを行っています。

・定期的に音読の宿題を音声入力し、提出させています。
・昨年度の総合的な学習の時間でも、アンケートの作成をしました。
・係の紹介カードの作成や係活動の時もタブレット端末を使って行っています。
・新たな技術を習熟する時は、学年の先生で事前に相談し、指導計画を立てています。

⑥一人一人の評価、通知表への所見はどのようにしていますか。こどもたちのどのような姿を評価していきますか。所見欄に記載する文言例などがあれば、知りたいです。

５年・６年

今年度は、総合的な学習の時間の中で「おおたの未来づくり」という位置付けでの学習を行っています。そのため、総合的な学習の時間の所見に合わせて「単元名」→「活動の様子」→「評価」と記載していきます。（文字数８０字程度）

⑦それぞれの学年で目指すゴールはどこなのだろうと感じました。例えば、５年生で考えると、子どもたちが考えたパンが製品となって売られることがゴールなのですか。

５年

５年生は「ものづくり」の中で、「提案型」の単元にしました。ゴールは、「新作パンのプレゼンテーションを各班が行い、ライフの方にフィードバックしていただくこと」としました。

しかし、そこで終わりではなく、自分が考えたパンを商品化までさせることは、児童の意欲も高まり、５年生の中でも目指していきたいところです。また、商品化の際には、売り場を一緒に作らせてもらったり、ポップや広告を作成させてもらったりできたらといった計画も考えていました。

今年度もいくつかのパンは商品化の検討をしていただけるお話はありました。今回は、今年度から初めて行った実践であったため、ライフとどこまで連携できるのかは不明瞭な部分がありました。次年度以降は、児童が考えたパンを商品化するところまでをゴールとしていけるよう引き継ぎを行っていきます。

６年

６年生は「地域の創生」の中で、「提案型」の単元にしました。ゴールは、「臼木先生に理想のまちづくりについて提案をすること」としました。

単元を進めていく中で、昨年度の「ものづくり」のような具体的な「もの」が出来ていく内容ではないため、昨年度の学びを生かして、指導を行っていく必要性を感じました。

⑧授業を進めていくと、子どもたちの実態と指導計画にずれが生じてくると思います。どのように改善し、どのように工夫していますか。

改善策や工夫としては、
・学習を先行しているクラスの様子を学年で共有し、活動内容を精選する。
・ＩＣＴ支援員に授業に入っていただくことで、児童のタブレット端末の操作の習熟を図る。
・ふり返りを書かせることで、次の時間の活動の見通しをもたせる。または、活動の修正を図る。
・学習計画に余裕をもたせておく。また、それでも計画通りにいかない場面も出てくるので、学年で

話題にしたり相談したりすることで、内容を改善していく。
などのやり方が考えられます。

⑨自他の「よさ」とはなんですか？

「よさ」は「長所」と捉えています。自他のよさやもち味を生かして主体的に取り組むことで、以下のような態度を養えるようにしていくことをねらいとしています。

・協働による相乗効果を生み出せるように、多様な考え方を出し合った上で方向性を決定しようとすること
・アイデアを組み合わせて改善・修正しようとすること
・期限を意識して作業や調査に責任をもって取り組もうとすること
・お互いの特長やもち味を生かして作業を分担して取り組もうとすること

⑩「相手意識」とは、具体的にどういうことですか？「相手がいる」ということですか。「相手のために」ということですか。

「教科『おおたの未来づくり』指導の手引き（令和６年６月版）大田区教育委員会　３ 教科「おおたの未来づくり」の目標には、以下のような記載があります。

〈未来を創造するための見方・考え方について〉
未来を創造するための見方・考え方を働かせるとは、未来を自分事として捉え、地域の社会や人々のために自分たちができることを発見し、そのことに主体的に取り組むとともに、地位の社会や人々の「Well-being」を目指し、経験や既習学習を関連付けたり、相手意識に立って物事を多面的・多角的に考えたりしながら、他者との協働によって新たな価値を創り出すことである。

つまり、「相手意識」とは、「地域の社会や人々のためになる活動を行う」という意識だと捉えています。

⑪「みらいタイム」で、思考ツールを導入する時の工夫を知りたいです。

工夫としては、以下のようなことを行っています。

・全校で実施する「みらいタイム」の指導内容を計画し、系統的に習熟を図れるようにしています。
・年度初めの「みらいタイム」では、児童に「思考ツール」とは何かを説明し、これまでの学習の中で活用した経験を思い出させました。
・「使い方を知る回」と「練習する回」を設けました。
「使い方を知る回」では、教師が使い方を説明しながらクラス全員で取り組みます。「練習する回」では、テーマを決めて、個人またはグループで思考ツールを使って取り組みます。
・NHK for School　教科「総合」のクリップ動画を活用し、思考ツールを紹介しました。